

研究報告場面における留学生のメタ言語表現

—口頭発表教材のシラバス化の可能性を探る—

古 別 府 ひ づ る

Metalingual Expressions in the Oral Research Presentations
by Foreign Students and the Possibility of Making the Syllabus

Hizuru FURUBEPPU

研究報告場面における口頭発表において、留学生と日本人とのメタ言語表現の現れ方及び使用意識を調査し、比較・考察した結果、日本人の方が口頭発表に対してより配慮した結果の話し言葉のメタ言語表現を使用していることが明らかになった。一方、留学生は口頭発表に対するわかりやすさと定型表現の必要性を意識しながらも、その具体的な表現の使用が、日本人の多様さと比較して、限定されていることがわかった。これらの調査と結果より留学生のための研究報告場面における口頭発表に必要な表現をシラバス化することの可能性と意義を見出すことができた。

【キーワード】 メタ言語表現、定型表現、研究報告場面、口頭発表、留学生

1. はじめに

口頭発表による研究報告場面では、発表時に発表者が、自らの言語行動について敢えて言及しながら、発表を進めていくことがしばしば行われる。例えば、「まず、～について申し上げますと、」や「具体例をいくつか挙げますが、」や「以上、～をご説明致しました。」等のような表現に代表されるものである。古別府(1992)¹⁾では、このような表現は、発表者が実際、発表を進行する際に、付加していくものであり、同様の研究報告場面である論文等の書記言語に依る発表紙面においては、口頭発表程頻繁にその使

用が見られないことを示した。さらに、古別府(1993)²⁾では、このような研究報告場面における口頭発表のメタ言語表現には、話し手の聞き手に対するわかりやすさのための主観的な配慮(伝達過程調整)を中心に、聞き手との関係を良好に保つためのていねいさの配慮(対人関係調整)があるという結果を得た。

本稿では、日本人と留学生との研究報告場面における口頭発表のメタ言語表現の使用を調査・比較することで、留学生のメタ言語表現の使用実態を明らかにすることを試みる。

この調査を行うに至った契機は、ある留学生の発表に、「まず言語行動の資料搜したの。コミュニケーションの言葉出たの。最近の91年と92年のものがよく現れる。で、言語行動の言葉は初めて使ったのは、あのう、搜したの。…」と、何について何を述べたいのか、その過程も含め、非常につかみにくかったという筆者の経験に端を発する。つまり、このわかりにくさは、これから何について話すか、どう進めるかということを示す、発表の流れや構成についてのメタ言語表現の欠落によるのではないかと考えたためである。

日本の大学で学ぶ留学生にとって、口頭発表による研究報告は、重要な言語活動の場である。実際、日常の会話にはほとんど不自由しなくとも、非日常的な口頭発表の場でどのような表現を用いればよいのか困っている留学生は少なく

ない。最近では大学での口頭発表を重要なスキルの一つとして捉え、わかりやすく報告するための準備や発表での留意点、手続きの仕方などを豊富な例証とタスク形式で身につけさせる、あるいは、人前で発表することの情意面にも注目し、事前のケアを施すなどのきめ細やかな教材が出て来ている³⁾。

しかし、これらの教材は、発表の手続きに詳しくない日本人でも利用できるものである。この留学生でも日本人でも利用できるという曖昧さに疑問を感じる。つまり、母語としてインプットされた言語知識を備える日本人が、手続きがわかれば、発表の技術を習得できるという前提を、そのまま日本語学習者に当てはめることができるのであろうかという疑問である。少なくとも、日本人と留学生の口頭発表を特徴づける指標を探ることが根底に必要ではないだろうか。それが学習者のニーズを踏まえた日本語教育の一つのあり方であると考えられる。

これらの理由より、メタ言語表現という視点を取り上げ、日本人と留学生の研究報告場面における口頭発表の比較を行った。

2. メタ言語表現の概念規定

メタ言語表現の定義はその解釈により際限なく広がる可能性を持つ。杉戸・塚田(1991)⁴⁾は、「表現主体がいま行おうとする(ないし、いま行ったばかりの)言語行動について、その言語行動としての種類や機能を明示的に表現するもの」をメタ言語表現と呼んでいる。従って、本研究におけるメタ言語表現については、杉戸・塚田(1991)に準じつつ、以下の規定を設けることにする。

研究報告場面での口頭発表において、発表時に発表者が進行上用いるメタ言語表現(自分がこれから言うこと、及び、言ったことに言及する表現)で、例えば、「言う」「説明する」のように口に出して言うことを直接示す言葉、及び、「分析する」「検討する」のように自らの言語行動について、明示する言葉を含む表現

3. 調査の内容と方法

1)メタ言語表現の機能類型を示し、その上でメタ言語表現の形式化を試みる。

2)1)に基づき、研究報告場面での口頭発表のメタ言語表現使用の実際及び、研究報告場面での口頭発表への対処とメタ言語表現使用についての意識に関し、日本人、留学生別に調査し、比較・考察を行う。

3.1 メタ言語表現の機能の類型化

古別府(1993)では、口頭発表による研究報告場面のメタ言語表現を伝達過程調整と対人関係調整の配下のもと、以下の7種の機能に分類した。

- (1)「主題化」…これから述べるものが何についてかというテーマを示すメタ言語表現
例1)次に、否定表現の先行研究に参りますが、…
例2)まず、談話の結束性について説明いたしますと…
- (2)「論点化」…先行発言について言及したメタ言語表現
例1)以上、簡単に類型化の例をご説明しましたが、…
例2)それから、先ほど申し上げた訂正率9%…
- (3)「行動表示」…専門的内容に関する発表を成立させる言語行動の種類を積極的に明示するメタ言語表現 ()内は言語行動の種類
例1)ちょっと、付け加えておきますと、…(付加)
例2)これは、詳しく分析いたしますと…(分析)
- (4)「流れ表示」…伝達の流れの向きや取扱について示すメタ言語表現
例1)ちょっと、前後しますが、…
例2)1ページに戻りまして、…
- (5)「ことわり」…聞き手に何らかの影響を与える(与えた)と思われることに言及するメタ言語表現(「言い訳」に相当するものも含む)
例1)今から申し上げることはちょっと大

げさかもしれませんが、…

例2) 早口でしゃべってしまいまして、申し訳ありませんでした。

(6)「言い淀み」…適当な言葉が見つからない、あるいは、言い換えの言葉を探すときに出現するメタ言語表現

例1) ですから、その、なんて言うんでしょうか、…

例2) 学習者の個性と言いますか、…

(7)「儀礼」…あらたまった場での儀礼的メタ言語表現

例1) それでは、発表させていただきます。

例2) ご意見よろしく願っています。

3. 2 分析資料

調査のための分析資料は以下の(1)(2)である。

(1)研究報告場面での口頭発表のメタ言語表現使用の実際

日本人⇒1992年度国立国語研究所研究発表会「談話研究の目指すところ」より8種類5人分の発表部分のテープの書きおこし。発表者は研究員として口頭発表の経験を積んだ日本人。

留学生⇒1992年度及び1993年度広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専

攻修士論文中間発表会及び授業での9人分の発表部分のテープの書きおこし。発表者は韓国、中国、台湾の漢字圏から来日し、日本滞在期間が2年から3年の留学生。

(2)研究報告場面での口頭発表への対処及び、メタ言語表現使用についての意識

日本人⇒1994年3月～4月に広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻の大学院生9人に対し依頼したアンケート

留学生⇒(1)の資料と同じ被検者8人に対し依頼したアンケート(アンケートに関しては資料Aを参照)

4. 結果

4. 1 分析資料(1)の結果

日本人と留学生の発表に見られたメタ言語表現の機能別の異なりを中核を成す動詞と名詞を基準に配列したものが資料①と資料②である。資料①と②の「副詞的要素」は文末との呼応も含んだメタ言語表現の現れ方を知る上で重要と見做し項目を設けた。さらに、個々の発表者のメタ言語表現の機能別数を示したものが資料③と④である。以下、結果の特徴を挙げる。

①機能別特徴 表1参照

表1 日本人と留学生によるメタ言語表現の機能別特徴の比較

機能	特徴的要素	日本人	留学生
主題化 論点化	○中核になる名詞 ○副詞的要素	5種類(説明、発表、話、論点、話題) 種類が豊富(例:今、ただいま、最初、先ほど、さっき、ここに、繰り返して、以上など)	1種類(説明) 少ない(例:ここで、さっき、～を中心に)
	○中核になる動詞	9種類(言う、申す、強調する、示す、紹介する、述べる、話す、触れる、報告する)	2種類(言う、説明する)
	○中核になる動詞に続く形	種類が豊富(例:～た+体言、～たような、～たように～たが/けれども、～ました<言いきり>、～ばく仮定)、～る+ふうに)	少ない(例:～る+体言、～る+ふうに、～たように、～だが～)
	○指示詞	「そういう～」「こういった～」など、指示詞の「こ」系「そ」系に、「～という」の組み合わせを頻用	一例のみ(「そういうふうに」)
行動表示	○副詞的要素	「ひとりで」「簡単に」「正確に」「一般的に」などを加えて、いかに説明するかを具体的に示している	日本人のような特徴はほとんど見られなかった
流れ表示	○副詞的要素	「結論から先に」「大急ぎで」「ここまでで」「間を(飛ばしまして)」などを加えて流れの調整を示す表現が多い	「あとで、また詳しく」「前に(戻りたいと思います)」のみ
ことわり 言い淀み		23種類 5種類	1種類 0種類

儀礼	発表の最初を「～と申します。」のように、自らを名乗る形でのメタ言語表現が見られた。	それでは、発表させていただきまます、以上で発表を終わらせていただきます」のように「発表する」ことに敢えて言及する表現を用いている。
----	---	---

② 全体的特徴

○メタ言語表現の使用には日本人、留学生双方において個人差がある。

日本人の場合、メタ言語表現の使用が、その総数において少ないのは、発表時間の長さも関係していると考えられる(資料③)。しかし、B、C、DとB'、C'、D'がそれぞれ、ほぼ同じ発表時間で、BとB'、CとC'、DとD'が、同一人物であることより、個人的に、B(B')のメタ言語表現の使用が多く、中でも機能としての「ことわり」の使用が顕著であると言えるであろう。一方、留学生の場合、iにおいては、ほとんどメタ言語表現が見られ

ず、わずか2例であった。それに対し、aは、留学生の中でメタ言語表現の使用が最も多く、「ことわり」と「言い淀み」以外の全ての機能におけるメタ言語表現が見られた。

○日本人、留学生双方において「言う」「申す」の動詞を含むメタ言語表現の種類が最も多く特に日本人の場合、「言う」「申す」を用いたメタ言語表現はすべての機能において見られた。

○日本人の方がメタ言語表現の種類が豊富である。資料①②よりメタ言語表現の中核を成す動詞と名詞の種類で比較したものが表2である。

表2 日本人と留学生によるメタ言語表現の中核を成す動詞と名詞の種類の内訳の比較

	メタ言語表現の中核を成す動詞の種類	メタ言語表現の中核を成す名詞の種類
日本人	29種類	12種類
留学生	23種類	3種類
日本人と留学生に共通	12種類 (言う, 言い換える, 終わる, 確認する, 紹介する, 説明する, 願う, 述べる, 入る, まとめる, 見る, 戻る)	1種類 (説明)
日本人のみ	17種類 (扱う, 申す, 急ぐ, 割愛する, 強調する, 答える, ことわる, 指摘する, 示す, 進める, 注目する, 飛ばす, 取り上げる, 話す, 触れる, 報告する, やめる)	11種類 (挨拶, 言い方, 急ぎ, こと, 前置き, まとめ, 発表, 話, 論点, 話題, 例)
留学生のみ	11種類 (移る, 行く, 参る, 解説する, 考える, 省略する, 整理する, 始める, 発表する, 比較する, 読む)	2種類 (以上, 分析)

さらに、日本人の場合、「一般的に言って」「簡単に申しますと」「もっと正確に言えば」の下線部のように副詞的要素を付加することで、メタ言語表現のバリエーションをより豊かにしている。

4. 2 分析資料(2)の結果

アンケート(資料A参照)のそれぞれの質問事項について得られた回答の結果を異なりで示したものが表3である。

表3 日本人と留学生によるアンケートへの回答の異なりの特徴

質問	日本人	留学生
(1)	声の大きさ, 話すスピード, 内容のわかりやすさ	正確さ, 内容のわかりやすさ, 定型表現, 待遇表現

研究報告場面における留学生のメタ言語表現

(2)	起承転結, 目的⇒方法⇒結果⇒考察⇒まとめ, 題目の説明⇒手順の説明⇒各内容	序論⇒本論⇒結論という構成, わからない
(3)	はい (全員)	はい (全員)
(4)	はい (9人中7人)	はい (8人中7人)
(4)'	ダ体とデス・マス体, 漢語的と和語的, 口頭発表では次の予告や解説のための表現を多用したり, わかりにくい所は違う表現で繰り返したり, 聞き手の理解度に応じて話す	話し言葉と書き言葉, 敬語, 次に移るときの予告
(5)(6)	多様な表現	
(7)~(11)	多様な表現	(8)に「こういった〜」「そういった〜」の表現が見られなかった
(7)'	聞き手に心積もりを与える, 丁寧, 唐突さを避ける, 展開を明確にする, 整理, わかりやすさ, あらたまり, 主題への認識	丁寧, 聞き手への理解
(8)'	丁寧さ, 結束性の明示, 発展, 確認, 関連性の明示, 注意の喚起, 聞き手への理解, 聞き手が抵抗無くついていくよう	わかりやすさ, 想起, 強調
(9)'	聞き手への理解, 聞き手の混乱を避ける, 効果をねらった表現とは考えられない	丁寧, わかりやすさ, おもいやり, 聞き手への理解整理
(10)'	発表者の態度を明確にする, 強調, わかりやすさ, 注意の喚起	強調, 注目
(11)'	間を埋める, 緊張を避ける, 発表者の内容の整理, 場つなぎ, 時間稼ぎ, 逃げ, 聞き手の混乱防止, 不確かさを知らせ, 聞き手の抵抗を取り除く	時間稼ぎ, 言葉の模索, 聞き手と一緒に考える
(12)	はい (9人中6人)	はい (8人中4人)
(12)a	説明の仕方, 時間制限, 調査内容についてのことわり表現が実現例としてあった	日本語の拙さ, 訂正箇所, 時間の制限についてのことわり表現があった
(12)b	相手の立場を優位に保つ, 聞き手からの批判防止, 聞き手への配慮, 逃げ	相手への理解を求める, 雰囲気のを和らげる
(12)c	言い訳がましい (7件), 自信がなさそう (3件), 場合による, 耳障り, (各1件)	丁寧又は親切(5件), 言い訳がましい(4件), 自信がなさそう (1件)
①		ある (8人中6人)
①'		待遇表現, 予告する日本語の習慣, 正確さ, わかりやすさ
②		はい (8人中3人)

* (12)c は一人で複数の回答をしているため, 被検者の数を越えた回答数になっている。

5. 考察

5. 1 伝達関係調整と対人関係調整の意識化

表3の結果からも, メタ言語表現の使用が, わかりやすさと丁寧さ, 即ち, 伝達関係調整と対人関係調整に関係することを発表者自身が意識していることがわかる。これより, メタ言語表現の使用が聞き手への配慮から誘発されたものであるという点においてメタ言語表現使用に一つの意義を示したことになる。その意識は日本人だけではなく留学生も同じように捉えている。ただ, その意識を持ちながらも, 口頭発表への具体的対処へと結び付いていないのが留学生の特色と言える。その対処の方法の一つが, 口頭発表特有の表現と関係することに留学生は気付いている(表3(1)①')。実際の発表(資料③)においても口頭発表の流れあるいは構成に関わ

るメタ言語表現(「主題化」「行動表示」「流れ表示」)や口頭発表の最初と最後に「儀礼」のメタ言語表現が見られたことより, 口頭発表に対する配慮を持ち, それを意識的に明示しようとする姿勢は何える。

しかし, メタ言語表現の現れ方やその効果についての認識は漠然として不十分である。実際, 調査後の感想で, 「発表時の自分の表現が適切かどうか自信が無い」と述べた者もいた。

一方, 日本人発表者は, アンケートによるメタ言語表現の効果を問う質問に対し, 聞き手を明らかに想定した具体的な記述が特徴的であった。もっとも, 日本人側も, 同じく調査後の感想で「自分の発表をいちいちモニタリングしているわけではない」, 又は, 「アンケートに答えたメタ言語表現以外にも実際はもっと使用しているのかもしれない」と述べた者もあり, 常に

意識化してメタ言語表現を使用しているとは限らない。

しかし、日本人の場合、母語としての学習と経験の積み重ねの中で敢えて強く意識化しなくても、比較的、多様で効果的な表現が出現しやすいと思われる。日本語教育は日本語を外から眺め、日本語の構造や運用のあり方を敢えて意識化することであり、学習者はその意識化を通して、習得していくと考える。メタ言語表現が口頭発表の中でどのような現れ方と表現形式を持つか、その効果にはどのようなものがあるかと考えているか、そして留学生の発表に不足しているものにどんなものがあるかを指摘することは、学習者側にとり、日本語の口頭発表の実際のスタイルを学ぶ手がかりになるのではないか。

5. 2 留学生の「話し言葉的」メタ言語表現の相対的不足

以上の調査結果より、留学生の口頭発表について総括的に指摘できることは、「話し言葉的」メタ言語表現の相対的不足である。以下、その理由を「論点化」「ことわり」「言い淀み」の、より話し言葉的な機能の点から述べる。

a : 論点化

「論点化」は、これまで述べたことに再び言及することで、繋がりを明確にしようとする行為であるが、話し言葉の一回性によって、その使用が促されるものと考えられる。即ち、話し手の聞き手が話の軌道から外れないための配慮の現れと考えられる。資料①②や表3の(8)(8)の結果より、留学生より日本人の方が軌道調整のメタ言語表現を多様に用いており、また、聞き手の理解を「論点化」のメタ言語表現の使用に結び付け、より深い効果への認識を持っているのが伺える。特に、「そういう～」「こういった～」という表現が、留学生には日本人程頻繁に現れず、アンケート調査では表現例を示したにも係わらず(資料A⑧)、使用例が見られなかった。野沢(1988)⁵⁾は、講義文の話し言葉の度合いが高まる一特徴に、「そういう～」「こういった～」という指示詞のこ系、そ系に、「～という」がつく語を挙げている。つまりこの点からも日本人の方が、より話し言葉的な表現を用いてい

ると言えるのではないだろうか。

b. 「ことわり」

書き言葉の論文等では、読み手に不都合な状況を与える(与えた)言語内容に対し、言及する以前に、推敲の過程でそれを回避しようとするので、「ことわり」は話し言葉程頻繁に用いられないのが予想される。今回、資料①で出現した「ことわり」表現が何についてことわっているかを見ると、時間について(例:「限られた時間で総花的なことを言って、かえってわかりにくかったと思いますけれども、…」)、話の段取りについて(例:「随分、前置きが長くなりましたが、…」)、発表の場で浮かんだ言葉について(例:「ありふれたと言ってしまうといけません、…」)など一回切りの伝達行為で、時間制限があり、かつ、聞き手を眼前にした口頭発表の状況に起因しているものが多い。

換言すれば、ここでの「ことわり」は、伝達調整のためのメタ言語表現(例:「～についてご報告します」など)というよりも、口頭発表の状況を作り出している要因に対するの評価を行っているものである(例えば、話題に対し、「初めから、変な話で申し訳ないんですが、…」、時間制限に対し、「読んでいる時間がなくて申し訳ないんですが、…」、口頭発表が話し言葉であるのに対し、「話し言葉では何です、…」)。評価は個人の価値観に左右されるので、「ことわり」の使用は恣意的で、個人差がある(資料③)。

今回の調査で、留学生の発表にはほとんど「ことわり」の使用は見られなかったが、留学生から見た使用の効果は、「丁寧または親切である」とともに、「言い訳がましい」のプラスとマイナス両方の評価が見られた(表3)。それに対し、日本人のほうは「言い訳がましい」「自身がなさそう」「耳障り」というネガティブな評価が優勢にもかかわらず、使用すると答えた人が多いという一見矛盾した結果が現れている。これは、「ことわり」に「ことわり」たい話者の心的態度が働いていると考えられる。話し手になった時の「ことわり」と聞き手に回った時の「ことわり」のとらえ方に差がある、それはどうか、今後、考察を要するものである。

c. 「言い淀み」

さらに、「言い淀み」の表現は、話すという認識のもとでの話し手の言語表現の模索であり、まさしく話し言葉の特徴である。留学生の発表で、「言い淀み」が見られなかったことは、より書き言葉的とも言える。

もっとも、例えば、留学生の中には、「なんか」や「なんとか」の頻用が見られ、「なんとか」が、実は、「なんというか」の誤用であることが推測され、口頭発表などのあらたまった場での適当な「言い淀み」の表現を知らないということも考えられる。また、表3のアンケートの質問項目(11)での留学生の表現例は、非常に限られており、「何と言ったらいいのでしょうか」に類するものしか出てこなかった。それ対し、日本人のほうは、「そうですねえ、～とでも申しませうか…」や「～と言ったらいいのでしょうか」や「これが…そのう、何と言うか、言ってみれば…」などのように多様な言い回しを知っている。また、表3の(12)bの結果より、「言い淀み」の使用効果を戦略的に捉えている。

これらのことから、日本人の方は、「言い淀み」によって、聞き手の存在を意識していることを口頭発表の中で、より具現化している。

6. まとめ

以上の調査・結果・考察より大きく以下の2点が結論として挙げられる。

(1)留学生より日本人のほうが、メタ言語表現を多様に使用している。

(2)留学生より日本人のほうが、口頭発表への認識が深く、口頭発表の状況を踏まえたメタ言語表現を使用し、話し言葉的である。

以上、日本人、留学生間の機能別のメタ言語表現の異なりと表現形式を示し得たこと、及び、原稿をそのまま読むという書き言葉に近い行為から柔軟性のある話し言葉的なものへと移行するときなどにどんなメタ言語表現が出現しやすいかを提示したことで、留学生に求められるメタ言語表現のシラバス化の指標が得られたのではないかと考える。

7. 今後の課題

今回の限られた分析資料だけで、日本人と留学生の研究報告場面における口頭発表のメタ言語表現の特徴を結論づけるには質・量ともに再考の必要がある。例えば、分析対象者の数やアンケート内容の具体性などにおいてである。また、メタ言語表現の本来の意味とその広がりを「メタ」そのものの意味に立ち戻って考え、伝達過程調整と対人関係調整の配慮の上位でメタ言語表現の使用を統括しているものは何かを探る必要があるであろう。それによって、「ことわり」、及び、研究報告場面での口頭発表以外の日常的なメタ言語表現の使用の解明にもつながるのではないかと考えるからである。

本稿は平成6年度日本語教育学会春季大会での発表を発展させたものである⁶⁾。また、日本人の口頭発表資料は科研1993年総合研究A「日本語教育における社会言語学的基盤に関する総合的研究」に使用した資料の一部である。

引用参考文献

- 1) 古別府ひづる：『『発表』における『メタリソナル表現』の機能』『教育学研究紀要』第38巻 中国四国教育学会教育学研究紀要』第38巻中四国教育学会編（1992）
- 2) 古別府ひづる：『『発表』におけるメタ言語表現の研究』広島大学修士論文（1993）
- 3) 東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会：『日本語口頭発表と討論の技術』東海大学出版会（1995）
- 4) 杉戸清樹・塚田実知代：「言語行動を説明する言語表現—専門的文章の場合」『研究報告集12』 国立国語研究所 秀英出版（1991）
- 5) 野沢素子：「大学の講義における書き言葉と話し言葉」『日本語と日本語教育』17号 慶応義塾大学国際センター（1988）
- 6) 古別府ひづる：「研究報告場面における口頭発表のメタ言語表現」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会（1994）

資料③ 日本人のメタ言語表現の機能別数

発表者	機能	主題化	論点化	行動表示	流れ表示	ことわり	言い込み	儀礼	計
A	1	13	4	1	2	5	1	27	
B	6	23	17	6	14	1	1	68	
C	6	19	0	2	1	5	0	33	
D	9	17	8	6	2	7	1	48	
E	3	3	4	3	2	2	0	17	
B'	0	2	3	0	2	2	0	9	
C'	0	2	1	0	0	0	0	3	
D'	2	2	0	0	0	0	0	4	

発表時間 A⇒15分 B⇒30分 C⇒25分
 D⇒25分 E⇒15分 B'⇒10分
 C'⇒10分 D'⇒10分
 (BCDはB'C'D'は同一人物)

資料④ 留学生のメタ言語表現の機能別数

発表者	機能	主題化	論点化	行動表示	流れ表示	ことわり	言い込み	儀礼	計
a	7	2	0	7	0	0	1	17	
b	2	2	4	1	0	0	0	9	
c	1	1	0	0	0	0	1	3	
d	1	0	1	2	0	0	1	5	
e	0	0	6	2	0	0	0	8	
f	1	0	2	3	0	0	0	6	
g	4	2	2	2	0	0	1	11	
h	3	1	1	2	0	0	1	8	
i	0	0	1	0	1	0	0	2	

発表時間 a～i⇒15分～20分

資料② 留学生のメタ言語表現の異なり

機能	(主要化)	(論点化)	(行動表示)	(流れ表示)	(ことわり)	(言い込み)	(儀礼)
中核となる動詞または名詞	副詞的要素	副詞的要素	副詞的要素	副詞的要素	副詞的要素	副詞的要素	副詞的要素
①言う	～かと	ここで さっきも そう	いかわゆる～ 言い換えれば	～のほうへ ～のほうへ ～のところに 以上、発表を 終わらせていただきます	という結果ですけれども		
②言い換える	～を簡単に		理解したいと思 います 考えますと				
③答える	簡単に		～を ～で				
④折角	～を簡単に		～を ～で				
⑤紹介する	簡単に		～を ～で				
⑥発表する	～を簡単に		～を ～で				
⑦解読する	簡単に		～を ～で				
⑧解読する	簡単に		～を ～で				
⑨答える	簡単に		～を ～で				
⑩紹介する	簡単に		～を ～で				
⑪発表する	簡単に		～を ～で				
⑫解読する	簡単に		～を ～で				
⑬解読する	簡単に		～を ～で				
⑭折角	簡単に		～を ～で				
⑮答える	簡単に		～を ～で				
⑯折角	簡単に		～を ～で				
⑰折角	簡単に		～を ～で				
⑱折角	簡単に		～を ～で				
⑲折角	簡単に		～を ～で				
⑳折角	簡単に		～を ～で				
㉑折角	簡単に		～を ～で				
㉒折角	簡単に		～を ～で				
㉓折角	簡単に		～を ～で				
㉔折角	簡単に		～を ～で				
㉕折角	簡単に		～を ～で				
㉖折角	簡単に		～を ～で				
㉗折角	簡単に		～を ～で				
㉘折角	簡単に		～を ～で				
㉙折角	簡単に		～を ～で				
㉚折角	簡単に		～を ～で				
㉛折角	簡単に		～を ～で				
㉜折角	簡単に		～を ～で				
㉝折角	簡単に		～を ～で				
㉞折角	簡単に		～を ～で				
㉟折角	簡単に		～を ～で				
㊱折角	簡単に		～を ～で				
㊲折角	簡単に		～を ～で				
㊳折角	簡単に		～を ～で				
㊴折角	簡単に		～を ～で				
㊵折角	簡単に		～を ～で				
㊶折角	簡単に		～を ～で				
㊷折角	簡単に		～を ～で				
㊸折角	簡単に		～を ～で				
㊹折角	簡単に		～を ～で				
㊺折角	簡単に		～を ～で				
㊻折角	簡単に		～を ～で				
㊼折角	簡単に		～を ～で				
㊽折角	簡単に		～を ～で				
㊾折角	簡単に		～を ～で				
㊿折角	簡単に		～を ～で				

メタ言語表現の中核を成す動詞 (1)～(23) メタ言語表現の中核を成す名詞 1～3

資料A 研究報告場面での対処及び、メタ言語表現使用についての意識を問うアンケート

【日本人と留学生に対する共通質問項目】

- (1)口頭発表の際、どんなことに気を付けますか。
 (2)口頭発表はどのような構成で話しますか。
 (3)口頭発表の際、レジュメを作りますか。
 (4)書き言葉の論文やレポートと口頭発表とで発表の仕方に区別をつけていますか。
 (4) どんなところに区別を付けますか{(4)で、「はい」と答えた場合}。
 (5)口頭発表の際、何と言って始めますか。
 (6)口頭発表の際、何と言って終わりますか。
 (7)口頭発表の際、これから何について話すかを下記のどの動詞を用いて言いますか。よく用いる動詞に印をつけて表現例を示してください。また、下記の動詞以外に思いつくものがあれば、動詞と表現例を示してください。
 例) 話す→～をお話していきたいと思います。
 ●言う ●申す ●申し上げる ●示す ●説明する ●述べる ●話す ●入る ●触れる ●報告する ●見る ●行く ●参る ●発表する
 (7) (7)のような表現を用いることに何らかの効果があれば、それはどんな効果ですか。
 (8)口頭発表の際、発表の中で前に述べたことをもう一度持ち出すとき下記のどの表現を用いますか。よく用いる表現に印をつけて表現例を示してください。また、下記の表現以外に思いつくものがあれば、表現例を示してください。 例) 先ほど→先ほど～と申しましたけれども、…。
 ●先ほど ●以上 ●こういった ●そういった
 (8) (8)のような表現を用いることに何らかの効果があれば、それはどんな効果ですか。
 (9)口頭発表の際、順番や流れを示すために下記のどの動詞を用いますか。よく用いる動詞に印をつけて表現例を示してください。また、下記の動詞以外に思いつくものがあれば、動詞と表現例を示してください。
 例) 割愛する→～については割愛したいと思います。
 ●急ぐ ●終わる ●割愛する ●進める ●前後する ●飛ばす ●まとめる ●戻る ●やめる ●移る ●省略する ●整理する ●始める
 (10)口頭発表の際、(8)(9)に挙げた動詞以外に、下記の動詞でよく用いる動詞に印をつけて表現例を示してください。
 例) 比較する→～と～を比較してみると、…。
 ●扱う ●言い換える ●確認する ●強調する ●ことわる ●指摘する ●紹介する ●注目する ●取り上げる ●願う ●例にあげる ●例にとる ●考える ●比較する ●分析する ●読む
 (10) (10)のような表現を用いることに何らかの効果があれば、それはどんな効果ですか。
 (11)適当な言葉が見つからないときどんな表現を用いますか。思いつくだけ書いてください。 例) 何と申しましようか、…。、何というか、…。
 (11) (11)のような表現を用いることに何らかの効果があれば、それはどんな効果ですか。
 (12)聞き手に不都合な状況を与える(与えた)と思われることに対して、ことわることをよくしますか。
 (12) a. そのときどんな表現を用いますか。思いつくだけ書いてください{(12)で、「はい」と答えた場合}。 例) 蛇足ですが、…。
 (12) b. (12)のような表現を用いることに何らかの効果があれば、それはどんな効果ですか。
 (12) c. (12)のような表現に対してどんなイメージを持っていますか。あてはまるものに印をつけてください。
 ●丁寧または親切 ●言い訳がましい ●自信が無さそう ●その他

【留学生のみの質問項目】

- ①日本語の口頭発表と母語の口頭発表とは、配慮に違いがありますか。
 ① どう違いますか{(①で「ある」と答えた場合)}。
 ② ネイティブ・チェックを受けますか。([日本人と留学生に対する共通質問項目]の(3)で「はい」と答えた留学生に対して)

* (1)～(4)は口頭発表全体の対処について、(5)～(12)は口頭発表でのメタ言語表現の使用に関する意識的な捉え方を問う。また、メタ言語表現の類型化より(5)(6)は「儀礼」、(7)は「主題化」、(8)は「論点化」、(9)は「流れ表示」、(10)は「行動表示」、(11)は「言い淀み」、(12)は、「ことわり」の機能について問う。また、(7)(9)(10)で提示されている動詞は、分析資料①の調査・結果で中核になる動詞として抽出されたものである。